OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウィトゲンシュタインの規準概念と行動主義 : クック著『ウィトゲンシュタイン、経験論、そして言語』をめぐって
Author(s)	中谷, 隆雄
Citation	メタフュシカ. 2004, 35(2), p. 41-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7304
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ウィトゲンシュタインの規準概念と行動主義

― クック著『ウィトゲンシュタイン、経験論、そして言語』[1]をめぐって ―

中谷隆雄

１　行動主義の意味

本稿では、クック著『ウィトゲンシュタイン、経験論、そして言語』を手掛かりに、ウィトゲンシュタインの規準概念と行動主義について考察してみた。

後期ウィトゲンシュタインは行動主義を採っている、とクックは言う。ただ、クックがそう言うときの行動主義（以下、行動主義ⓦと略）は、ふつうその語によって意味されているものとは多少異なっている。行動主義ⓦは、もちろん、心的存在を否定する。つまり、行動主義ⓦは、その存在論的側面については従来の行動主義と変わらない。しかし、その言語的側面については､行動主義ⓦは従来の行動主義と異なる｡このことは還元という観点から説明されるが、ただ従来の行動主義はさらに二つに分けられ、計三つの行動主義が区別される[2]。

	［存在論的側面］	［言語的側面］
１．実質的行動主義	○	×
２．分析的行動主義	○	○
３．行動主義ⓦ	○	△

この三つの立場はともに還元的であるが、立場によって「還元的」の意味が異なる。

実質的行動主義[3]が還元的なのは、単に心的存在を否定することによって存在者の種類を減少させるからであり、それ以上の理由はない。

---

1 Cook, J. W., *Wittgenstein, Empiricism, and Language*, Oxford, 1999.

2 Cook, *ibid.*, p.48-9.

3 議論を分かりやすくするために、実質的還元主義を実質的行動主義、分析的還元主義を分析的行動主義と言い換えた。このように言い換えても、クックの論旨を大きく損なうことはないと思う。

分析的行動主義は、二つの意味で、還元的である。それは、第一に、行動用語（泣く、笑う、……）への翻訳によって心的用語（悲しい、うれしい、……）を消去するからであり、第二に、そうすることによって、心的存在を否定して存在者の種類を減少させるからである。

第三の行動主義Ⓦも、前二者と同じく、心的存在を否定して存在者の種類を減少させる点で、還元的である。しかし、行動主義Ⓦは、心的用語に対する態度が前二者とは異なる。実質的行動主義は心的用語についていかなる見解も採らず、分析的行動主義は物的用語への翻訳によって心的用語を消去可能にすることをもくろむが、行動主義Ⓦは、この二者のいずれとも異なり、心的用語の用法を記述するだけで、心的用語を消去しようとはしない。

心的存在については、行動主義Ⓦも否定する。ただ、分析的行動主義が心的用語を消去することによって心的存在を否定するのに対して、行動主義Ⓦは、心的用語の用法を記述することによって心的存在を否定するわけではない。心的用語の用法を記述するからといって、心的存在が否定される必要はないからである。ならば、なぜ心的存在が否定されるのか。クックはそれをウィトゲンシュタインの前期思想の残滓だと説明する。クックによれば、『論考』[4]は分析的行動主義であったが、『探究』では、それが捨てられて行動主義Ⓦが採られたという。たしかに、ウィトゲンシュタインは、『論考』で分析的行動主義を明言しているわけではない。しかし、『論考』には、命題は完全に分析可能である (3.201, 3.23, 3.25) という思想がある。それに加えて、そこに経験論的傾向があったのだと解釈できるなら (5.5561, 6.363)、ウィトゲンシュタインは潜在的に分析的行動主義者であったと言えるであろう[5]。つまり、そう解釈できれば、心的用語を含む命題は、経験可能な物的用語のみを含む要素命題に完全に分析可能となるために、前者は消去可能となるからである。ところが、後年、「完全な分析」は否定される。『哲学的文法』でウィトゲンシュタインは次のように言っている[6]。

> 「私は以前には『完全な分析』というところまで語っていた。そして、そのときに考えていたのは、哲学は、すべての命題を分析し、その結果、あらゆる連関を明らかにして、誤解のどんな可能性をも取り除かなければならないということであった。・・・以上すべての根底には、言語の用法についての誤った、そして理想化されたイメージがあった。」
> (Anhang 4B)

コンテキストを考慮すれば、ここで命題の、ひいては概念の「完全な分析」という思想が撤回されているのは明白である。そして、前期の分析的行動主義から後期の行動主義Ⓦへの転回点がこのあたりだと言えるかもしれない。というのも、このあたりを起点にして、ウィトゲンシュタインが心理用語の記述へと向かうのが、これ以降のように思えるからである。ただ、クッ

---

4 使用したテキストは、*Tractatus Logico-Philosophicus* (『論考』)、*Philosophische Grammatik* (『哲学的文法』)、*Zettel* (『断片』)、 "Wittgenstein's Notes for Lectures on 'Private Experience' and 'Sense Data'" ed. Rush Rhees, *Philosophical Reviews*, vol. 77 (July 1968) (『講義ノート』) 、 *Philosophische Untersuchungen* (『探究』) であり、『講義ノート』のみ頁を、他は節番号を、それぞれ本文中に記した。

5 Glock,Hans-Johann, *A Wittgenstein Dictionary* (Blackwell 1996) p. 56.

6 Cook, *ibid.*, p. 56-7.

クによれば、ウィトゲンシュタインはその経験論的傾向を払拭できなかった。そのために、心的存在は依然として否定されつづける。

とかもく、「完全な分析」という思想を捨てたのは、「言語の用法についての誤った、そして理想化されたイメージ」が覆されたからだ、とウィトゲンシュタインは言う。それは、言語の道具的性格が把握されたからである、とクックは推測する[7]。そもそも、心的用語にしろ、行動用語にしろ、言語ゲームによって作られた道具である。心的用語が行動用語に還元できるか否かは、心的用語が行動用語で代替的に使用できるか否かにかかっている。しかし、何らかの心的用語を含む言明を行動用語のみを含む言明に置き換えたとしても、後者が前者と同じ機能を果たせないであろう。なぜなら、何らかの言語ゲームによってできた道具が、それとは基本的に性格を異にすると思われる言語ゲームによってできた道具で代替使用ができるとは言えないからである。

そこで、ウィトゲンシュタインは、心的用語を行動用語に還元することではなく、行動用語によって心的用語の用法を記述することをもくろむ。ただ、その際、行動だけでなく、行動を取り巻く状況にも言及せざるをえない[8]。「歯が痛い」の用法を例に考えてみる。かりに、①②③という三つの事態があるとしよう。

① 彼女は歯が痛い。
② 彼女は歯が痛いふりをしている。
③ 彼女は芝居の中で歯が痛む演技をしている。

「彼女は歯が痛い」という文が適用されるのは、①に対してである。ところが、彼女の行動のみに言及することによって、①の事態を記述しなければならないとすればどうなるか。①の記述は、例えば、「彼女はその手で頬を押さえる、彼女は顔をしかめる、等々」というようなものになるであろう。そして、②を記述しても、③を記述しても、同様のものになるであろう。つまり、彼女の行動の記述のみによっては、おそらく、①②③を区別することはできない。区別できなければ、「彼女は歯が痛い」という文の用法の記述には、彼女の歯が本当に痛い①だけでなく、彼女の歯が本当は痛くない②や③も含まれてしまう。その結果、①②③は、行動の記述のみによっては区別できなくなる。①②③は、行動の記述だけでなく、行動を取り巻く状況も考慮に入れなくてはならない。そして、そうすることによって、「彼女は歯が痛い」の用法が同定可能になるはずである。つまり、「彼女は歯が痛い」が、②でも③でもなく、①にのみ使用されることを意味する記述とするには、その記述には、行動の記述だけでなく、行動を取り巻く状況の記述も含めなくてはならない。

---

7 Cook, *ibid.*, p.57-60.

8 Cook, *ibid.*, p.84.

２　規準の登場

このように、身体行動のみによっては、ある人物に痛みがあるかどうか判断できない[9]。現に、『断片』でウィトゲンシュタインはこう言っている。

「かくかくの状況のもとでしかじか振る舞っている者について、私たちは、彼は悲しんでいると言う。」(526)

何らかの状況のもとでの何らかの身体行動に基づいて、私たちは、「彼は悲しい」と言い、また、それとは別の状況のもとでの別の身体行動に基づいて、私たちは、「彼女は歯が痛い」と言う。したがって、「悲しい」とか「歯が痛い」とかの表現の用法の記述には、行動の記述のみならず、その状況の記述も含まれなくてはならない。しかし、状況というものは、漠然としていて、記述しがたい。①の課題に答えるのは容易ではない。そこで、戦略的に、課題は①から②へシフトする。

①「いかにして心的用語は使用されるのか？」
②「いかなる規準で心的用語は使用されるのか？」

求められるのは、心的用語の用法の記述ではなく、心的用語の使用の大まかな目安の記述ということになる。大まかな目安が、すなわち規準である[10]。そして、ウィトゲンシュタインの規準概念は、六つの規則に従っているとクックは言う[11]。ここでは、そのうち、特に、行動主義Ⓦにかかわる次の二つについて検討したい。

[規則＃２] もしＹがＸの規準であるとすれば、ある意味では、ＸとＹは二つの別個のものではありえない。
[規則＃３] もしＹがＸの規準であるとすれば、ＸとＹは同じものではない。それは、ちょうど、義理の母と私の配偶者の母が同じでないのと同様である。つまり、「Ｘ」と「Ｙ」は同義ではない。

既述の通り、「完全な分析」が断念されて、心理用語は他の種類の用語に置き換えられない。それが規則＃３に反映している。他方、ウィトゲンシュタインは次のようにも言っている。

「しかし、私が真正の表情と偽りの表情とを明示的に区別しないとすれば、もし恥ずかし

---

[9] Cook, *ibid.*, p.84.
[10] クックによれば、規準概念を導入せざるをえなかったのも、規準概念が込み入ったものになったのも、ウィトゲンシュタインの経験論的傾向によるという。そして、このことは、『ウィトゲンシュタイン、経験論、そして言語』の主要テーマの一つになっている。これはさらに一考を要する問題であり、ここでは検討する余裕がない。ただ、経験論的傾向が規準概念導入の唯一の理由ではないと思う。Cook, *ibid.*, p.77.
[11] Cook, *ibid.*, p.78-85.

さの表情によって私が意味するものが、あなたが『表情＋感情』によって意味するものだと私が言えば、どうだろうか。私が思うに、真正の表情を表情と他の何かの和と述べることは誤解を招く。」(『講義ノート』p.302-3.)

ここでは、「表情」という表現を広く解釈して、「ある特定の状況下での表情」と理解しておく。このように「表情」を広く解釈しようと、字義通りに取ろうと、引用文の論旨には影響しない。ともかく、ウィトゲンシュタインが言わんとしているのは、真正の表情を「表情＋感情」とみなすことは誤解を招くということである。つまり、何らかの感情について、それが（装われたものではなく）真正のものとなるのは、そのときの表情に感情なるものが加わることによる、と言うのは誤解を招くというのである。ここから、ウィトゲンシュタインは表情と感情の二元論には与さない、ということが帰結する。

かりに、ある表情Ｙがある感情Ｘの規準であるとしよう。しかし、真正の表情は「表情＋感情」とみなせないのだから、表情Ｙが感情Ｘとは別個のものであると考えることはできない。この事情が、規則＃２で、「もしＹがＸの規準であるとすれば、ある意味では、ＸとＹは二つの別個のものではありえない」と表現されている。「ある意味では」というのは、典拠から推して、「存在論的に」と言い換えられるであろう。つまり、規則＃２に従えば、感情Ｘというのは、存在論的に、（ある特定の状況下での）表情Ｙとは別個のものにはならない。そして、この規則から行動主義が帰結する。

しかし、規則＃２は規則＃３と矛盾するように見える。規則＃２が「ある意味では、ＸとＹは二つの別個のものではありえない」と言っているのに対し、規則＃３は「ＸとＹは同じものではない」と言っているからである。しかし、クックによれば、この二つの規則は相互に矛盾しているように見えるが、実際はそうではない[12]。そのことを彼はトランプゲームを例に説明する。例えば、私が五枚のスペードを所有しているとする。しかし、単にそれだけでは、私にフラッシュの手があるとは言えない。私にフラッシュの手があると言うためには、そのとき私がポーカーゲームに参加していて、そしてその五枚のスペードがそのゲームで使用されている五十二枚のカードのうちの一部であるという条件が必要である。言い換えれば、五枚のスペードがフラッシュとなるためには、その五枚のカードがポーカーゲームでプレイヤーに扱われているという状況が必要である。五枚のスペードは、それを取り巻く状況がある種の条件を充たすことによって、フラッシュとなる。

以上の話を前提した上で、五枚のスペードが「スペードのフラッシュ」の規準であるとする。そのとき、スペードのフラッシュは、規則＃２の言うように、（存在論的には）五枚のスペード以外の何ものでもない。しかし、五枚のスペードを持ったからといって、直ちに、スペードのフラッシュの手を持ったとは言えない。それゆえ、規則＃３の言うように、「五枚のスペード」と「スペードのフラッシュ」とは同義ではない。このように考えれば、たしかに、規則＃２と規則＃３との矛盾は解消する。

[12] Cook, *ibid.*, p.80.

３　行動主義ⓦか否か

クックによれば、たいていの注釈家は、規則＃２を度外視して規則＃３に飛びつき、ウィトゲンシュタインは行動主義ⓦに反対していると解釈した[13]。例えば、その一人ケニーは言う。

> 「概念の適用のための規準が行動的だからといって、概念そのものが行動的であることにはならない。ＸがＹの規準であると言うことは、『探究』では、ＸがＹの定義であるとか、＜Ｙ＞はＸを意味すると言うことではない。」[14]

つまり、ケニーはこう考える。観察不可能な心的状態や過程は、その規準となっている（観察可能な）行動とは別個のものである。ウィトゲンシュタインは行動を規準として使用しているが、だからといって、彼が行動主義者になるわけではない[15]。それゆえ、心的状態と行動との二元論は維持される、と。

このケニーの解釈も、クックはポーカーで説明する。先と同様、五枚のスペードが「スペードのフラッシュ」の規準である。「概念の適用のための規準が行動的だからといって、概念そのものが行動的であることにはならない」のだから、ケニーの場合も、概念の基準と概念そのものとは同義ではない。それは、「五枚のスペード」と「スペードのフラッシュ」が同義でないのと同じことである。ゆえに、規則＃３は充たされる。ただ、ケニーの場合、五枚のスペードがフラッシュになるのは、五枚のスペードを取り巻く状況によるのではなく、五枚のスペードに（存在論的に）何かが付加されることによる。つまり、フラッシュは、（存在論的に）同じ種類の五枚のカード以上のものになる。ケニーがこのような解釈をしてしまうのは、規則＃２を考慮に入れなかったからである。ウィトゲンシュタインの規準概念には、規則＃２が含まれており、そして、それゆえに、その立場は行動主義ⓦとなる。

行動主義ⓦには二つの側面があった。一つが、心的用語の「完全な分析」を放棄して、心的用語の記述を目指す、という言語にかかわる側面であり、もう一つが、二元論には与さないという存在論的側面である。ケニーとクックが対立しているのは、前者ではなく、後者についてである。ケニーは、ウィトゲンシュタインが「観察不可能な心的状態や過程」の存在を認めていると解釈するのに対し、クックはそれに反対する。しかし、考慮すべき選択肢は、二つだけではない。つまり、選択肢は、心的存在を否定して行動主義ⓦを採るか、心的存在を肯定して行動主義ⓦを拒否するかの二つだけではない。心的存在を否定することもなければ肯定することもせずに、ひたすら心的用語の用法を記述することに専念する、という選択肢もある。心的用語の記述に取り組むからといって、必ずしも二元論に与する必要もないし、一元論に与する必要もない。ウィトゲンシュタインが存在論的にいずれにも関与していないことをほのめかす典拠は二つある。一つは、規則＃２のために引用した文の続きである。先の引用はクックに倣

---

[13] Cook, *ibid.*, p.198.
[14] "Criterion," in *The Encyclopedia of Philosophy*, ed.Paul Edwards (New York 1967),vol.2, p.260.
[15] Cook, *ibid.*, p.197.

ったものであって、『講義ノート』では次の文が続いている。

「ただ、もし真正の表情は特定の行動であってそれ以外の何物でもないと言うとしても、同様に誤解を招く――私たちの表情の機能を誤らせる。」(『講義ノート』p.302-3)

先の引用と合わせて考えると、ここでウィトゲンシュタインが言わんとするのは、真正の表情を「表情＋感情」とみなすことも誤解を招くし、真正の表情を「表情＋無」とみなすことも誤解を招くということである。つまり、何らかの感情について、それが（装われたものではなく）真正のものであるとき、そのときの表情に、存在論的に感情なるものが加わっていると言うことは誤解を招くし、そのときの表情に、存在論的に何も加わっていないと言うことも誤解を招く。つまり、表情と感情の二元論には与する必然性もなければ、感情を差し引いた表情のみの一元論に与する必然性もない。こう解釈できるなら、行動主義ⓦの拠り所である規則＃２は、裏付けを欠くことになる。

もう一つの典拠は『探究』からのものである。その３０４節でウィトゲンシュタインはこう言っている。

「『でも、痛みを伴う痛み振舞いと痛みを欠く痛み振舞いとのあいだに違いがあることを君は認めるだろう。』――認めるだって。それほど大きな違いはあるだろうか。『それでも君は再三再四、感覚そのものは無であるという結論にたどり着く。』――そんなことはない。感覚は、何らかのものではないが、しかし、何ものでもないというわけでもない。何ものでもないものが、何事も語られない何らかのものと同じ働きをするというのが結論であるにすぎない。私たちは、ここで私たちに迫ってこようとする文法を退けたにすぎない。」

たしかに、痛みを伴う痛み振舞いと痛みを欠く痛み振舞いとのあいだには明白な相違があるが、だからといって、痛み振舞いの背後に「何らかのもの」を想定する必然性もなければ、「何ものでもないもの」を想定する必然性もない。なぜなら、いずれの「もの」も何の機能も果たさないからである。要するに、存在論的にいずれか一方の見解を採るべき理由はない。

以上の文献的証拠だけでは、後期ウィトゲンシュタインが行動主義ⓦを採っていなかったと断定するには十分でないかもしれない。しかし、少なくとも、彼が行動主義者であったと解釈することが容易でないとだけは言えると思う。

（なかたにたかお　近畿大学非常勤講師）

［キーワード］
ウィトゲンシュタイン　　C．W．クック　　規準　　行動主義